

「パラダイム」とその周辺（1）

JDA理事 安藤温敏

ディベートの勝敗は、どのように決まるのでしょうか？ディベート甲子園ルールによれば、「メリットがデメリットより大きいと判断される場合には肯定側の勝利、そうでない場合には否定側の勝利となります。引き分けはありません。」となっています。すなわち、メリットとデメリットの大きさを勝敗を決めています。しかし、なぜこのような決め方をしているのでしょうか？実は、これにはパラダイムという概念が、大きく関わっています。そこで、ルールの理解を深めていただくことを目的として、パラダイムに関して連載をJDA理事の安藤さんをお願いしました。皆様のディベートへの理解が深まれば幸いです。（編集部）

1-1 はじめに

私がディベートを始めたころ（約二十年前！）と比べて、現在はディベートを学ぶ環境もだいぶ整ってきたように思います。書籍も、昔とは比べものにならないくらい良質のものが多数手に入るようになってきました。

しかしながら、ディベートを始めて、ある程度の技術を持った方がその先のスキルアップを求める段になると、途端に参考になる書物が少なくなるのもまた事実です。特に、これから審判としての活動を考えている方にとって、必要な知識が網羅されている書物は、ほぼ皆無に等しい状態です。

これから何回かにわたるこの連載では、ディベートの審判をするにあたって、是非知っておいて欲しいにも関わらず、これまで紹介されることがほとんど無かった「パラダイム」という概念を紹介していきます。この記事は主に、これから審判としてディベート活動に関わっていこうとされている方を対象にしていますが、もちろん現役のディベーターの皆さんでも知っていれば何かと役に立つでしょうし、もうパラダイムについては知っている、という上級者の方にとっても、知識の確認になるような内容を目指します。

1-2 パラダイムの簡単な定義

「パラダイム」という言葉は、純粋なディベート用語ではなくて、一般的な言葉としても使われています。そうした一般的な意味に興味のある方は別途調べていただくとして¹、ディベート理論の世界では、およ

そ「審判がディベートをどのように捕らえ、どのように個々の議論を評価し、試合の判定を下すか、その方法の基礎となる考え方」といった意味で使われています。

すなわち、パラダイムは、現実世界における論争をモデルにした（例えば、刑事裁判、政策決定、仮説の検証、など）、議論理解の前提条件である、と言えると思います。

これだけでは「何のことかさっぱり分からない」という声も聞こえてきそうですが、パラダイムの意味については今後自然と明らかになっていく（予定）ので、まずは雰囲気だけ感じ取っていただければ結構です。

一点重要なことは、ディベートの試合を審査する際のパラダイムは、実は複数あって、審判がどのパラダイムを採用しているかによって、同じディベートを見てもかなり異なった結果が出る可能性がある、ということです。

1-3 なぜパラダイムを理解する必要があるか？

1-3-1 ディベート甲子園ルールとパラダイム

皆さんは、ディベートの勝敗がどのように決定されるか、ご存じでしょうか。そう、メリットとデメリットを比較して、メリットの方が大きければ肯定側、そうでなければ否定側の勝利、ですね。ディベート甲子園のルール（細則D-4）にも、

「審判は、個々のメリット、デメリットの判断を基に、メリットの合計とデメリットの合計の比較を行い、どちらに投票する

¹ 例えば、Wikipediaなどにもかなり詳しく掲載されていますし、簡単な所だと広辞苑にも「…一時代の支配的な物の見方のこと。

かを決定します。」

とあります。また、ルールの中の部分（細則D-3）には、

「審判は、個々のメリットあるいはデメリットについて、以下の3点について検証を行い、大きさの判断を行います。

- 1) プランを導入しなければ、そのメリットあるいはデメリットが発生しないこと。
- 2) プランを導入すれば、そのメリットあるいはデメリットが発生すること。
- 3) そのメリットあるいはデメリットが重要・深刻な問題であること。」

とあります。ディベートに勝つためには、メリットまたはデメリットを出し、相手のメリットまたはデメリットを上回らなければならないこと、メリット・デメリットが成立するためには、固有性・発生過程・重要性が必要であるということを、皆さんは経験的に知っていると思います。

では、それはなぜなのか。わかりますか？「ルールに書いてあるから」ですか？では、そのルールはどうやって決まったのでしょうか。別に、常にメリットとデメリットの比較でディベートの結果を決めずとも、「頑張っているディベーター」や「スピーチのうまいディベーター」または「論題に関する知識がより豊富なディベーター」に対して投票する、というようなルールがあっても良いと思うのですが、そうならないのはなぜでしょう？

実は、こうしたルールの背景に、パラダイムが大きく関わっているのです。パラダイムは、ディベートにおける勝敗の決定や、ある議論が有効であるか、そうでないかを判断する際に、大きな役割を果たします。あるパラダイムの下では有効な議論が、別のパラダイムの下では、全く有効でなかったり、その逆のことが起こったりします。

従って、ディベーターがパラダイムを理解することによって、有効な議論とそうでない議論の判断が容易になります。また、ジャッジのパラダイムをあらかじめ知ることによって、そのジャッジに合わせた議論を行うことが可能になります。

また、ジャッジがパラダイムを理解することで、ある議論をどのように評価するか、判断が容易になります。そして「こんな議論は、ルールを見ても、どう解釈するか載っていない！」というような議論でも、判

断に迷うことは少なくなるでしょう。

1-3-2 パラダイムを知らないとうなるか

逆に、パラダイムのことを全く知らずにディベートをしたらどうなるでしょう。ある程度までは、何となく出した議論が有効に働くかも知れません。しかし、その議論がなぜ有効だったのか、負けたときには、なぜ議論が有効でなかったのか、理解することは難しいでしょう。それでも長くディベートを続ければ、経験的に、どうすれば良い結果が得られるか分かってくるとは思いますが、そのためにはあまりに多くの時間とエネルギーが必要です。

また、パラダイムのことを全く知らずに審判をする際にも問題が生じるでしょう。ありきたりの議論しか出ない、簡単な試合であればそれほど判断に迷うことも無いでしょうが、よく分からない議論、どう判断して良いか迷うような議論に遭遇したときに、どのように判断するか。とても頭の良い人であれば、その都度機転を利かせてさまざまな説明を後からすることができかもしれませんが、それでも首尾一貫した判断は難しいと思います。

1-4 次回以降の予定

先ほど、パラダイムにはさまざまな種類がある、と書きましたが、実はディベート甲子園においては、ほぼ一つのパラダイムに統一されている、と言って良いでしょう（パラダイムのことを知らない審判でも、意識せずに、このパラダイムを採用している、と言えます）。

今回は、このディベート甲子園の審判の基礎になっているパラダイム（「政策形成パラダイム」と呼ばれています）について解説していきます。そして、政策形成パラダイムの下で様々な議論の役割を定義し直してみたいと思います。

その後、政策形成パラダイムの特徴をより深く理解するために、それ以外のパラダイム（定常争点パラダイム、仮説検証パラダイムなど）も紹介していくつもりです。

皆様からのご質問もお受けいたします。可能な限り、この紙面でお答えしたいと思いますので、何かありましたら、

ando@ab.mbn.or.jpまでメールをお寄せ下さい。